

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

流動するアイデンティティ
— *Pudd'nhead Wilson* における
人種、ジェンダー、母性の虚構性

大久保 良子

流動するアイデンティティ

— *Pudd'nhead Wilson*における人種、ジェンダー、母性の虚構性

大久保 良子

序

少年物語を得意とするマーク・トウェイン作品の特色の一つとして、母親がほとんど描かれないことが挙げられる。より正確に言えば、実母が生存していてもほとんど登場せず、直接の母子関係よりも伯母と甥、そして父というより代理母的な要素を孕む男性と少年といった変奏形で描かれることが多い。「良い子」であるように諭し、家庭に縛り付けようとする伯母から逃れるところから始まる腕白少年たちの物語において、代理母的な役割を果たすのは、家庭の外での冒険を共にしつつ、ジェンダーや人種、階級の枠を超えて少年たちを守り、時には本気で叱り、そして少年を許し愛する、男性でありながらどこか母性的な要素を備えた人物である場合が多いのだ。その愛情を知ってようやく、母のいない少年たちは、母代わりの伯母たちの心配や愛情に強い共感を示すまでに成長する。¹⁾

性別にとらわれずに演じられうるジェンダーという概念に、トウェインは時代に先駆けて敏感であり、それを文学装置として積極的に作品に取り入れた作家であった。ハックが女物の服を着て少女になりすますものの結局は見破られる有名なエピソードを有する代表作『ハックルベリー・フィンの冒険 (*Adventures of Huckleberry Finn*)』(1885年) (以下『ハック・フィン』) 以外にも、多くの作品で異性装のモチーフを取り入れている。²⁾たとえば、『ハック・フィ

ン』において、他界した母、暴力的な父の代わりにハックを守り、その成長を支えるのは黒人奴隷のジムである。物語終盤、南部の農園に逃亡奴隷として囚われたジムの、トムとハックが救出しようとする場面において、ジムが女物の服を着せられ、子供を救うために自らを犠牲にする母の役割をトムの指示で演じさせられるという異性装の場面は、少年たちが母親に期待する役割を示すと同時に、ジェンダーのパフォーマティビティをよく表す場面といえよう。

異性装のモチーフを取り入れずとも男性が母親的役割を果たす作品も見られる。『王子と乞食(*The Prince and the Pauper*)』(1881年)において、ごく僅かに登場する実の母親よりも、より母親的な存在感を示すのは、常にそばで優しく少年を守るマイケル・ヘンドンである。乞食と衣装を取り替えた王子に接したヘンドンは、自分は王子であると信じ込んでいる寄る辺ない子供の友になろうと、腹心の家来として見守ることにする。しかし少年の寝顔を見ながら夜なべして服を縫い、甲斐甲斐しく身の回りの世話をするヘンドンは、家来というよりもむしろ母親的な愛情をもって少年を守る人物として描かれる。³⁾

こうした白人少年たちの疑似「母」たちは、子どもたちに振り回され、時に犠牲となってもなお、子どもたちを愛し続ける強さと寛容さをもれなく備えており、それによって子どもたちの自由が確保されているように見える。Toni Morrisonは『白さと想像力(*Playing in the Dark*)』の中で、『ハック・フィン』における白人少年と黒人奴隷ジムの関係を例に挙げ、人種という観点からこの傾向を「白人の自由がもつ寄生的性格」(93)として指摘した。本稿では、人種に加え、母性やジェンダーという観点も取り入れ、従属性が付随する母親像が『ハック・フィン』以降の作品でどのように変化しているか探りたい。というのも、(代理)母や女性キャラクターに関してパターン化した描写を行ってきたトウェインだが、『ハック・フィン』出版の十年後、同じ南北戦争以前(1830年代)のミズーリ州の田舎町を舞台とした『まぬけのウィルソン(*Pudd'nhead Wilson*)』(1894年)においては、珍しく直接の母子関係を扱い、生命力と強さ、美しさを誇る母——見た目は白人の混血女性ロクサーナ——を創出し、それによって、これまで描いてきた隷属性と結び付けられた母親像を美化せず自ら揺

るがし、人種やジェンダー、そして母性の虚構性により深く迫っているからだ。ここに始まる、ステレオタイプや社会、ジェンダー規範を脱する女性登場人物を描こうとするトウェインの試みは、『まぬけのウィルソン』や『ジャンヌ・ダルクの個人的回想』（1895年）以降、最晩年にかけて続けられる。人類の母イヴまでも再創造するトウェインのフェミニズムともいえるその挑戦——そして限界——を知るためにも、『間抜けのウィルソン』におけるロクサーナの描写を検討しておく必要がある。

本稿ではまず、『ハック・フィン』以降のトウェインのジェンダー意識の発展を探る手がかりとして『まぬけのウィルソン』を取り上げ、トウェインが、これまで一貫して描いてきた、子供に自己犠牲的に愛情を注ぐ母という、隷属性と結び付けられた母親像に疑問を投げかけ、その変更を試みようとするさまを明らかにする。それによって、これまでのステレオティピカルな女性像からは一線を画す、多層的で流動的なアイデンティティを持つムラートの母ロクサーナを創造するという最大の達成を得たことを確認したい。また、主従の関係、白さと黒さ、男女のジェンダーを転覆させながら、「母性」が孕む自己犠牲や、母子関係にも潜む支配構造を露わにしていくロクサーナ母子のプロットが、いかに人種、ジェンダー、母性を虚構として脱構築する力を帯びるか検討していく。このような多層的、流動的なアイデンティティとそれらが孕む転覆力を魅力とするロクサーナのプロットを描く一方で、トウェインは、執筆当時最先端科学であった指紋を物語に導入するアイデアに夢中になり、物語終盤はロクサーナ母子から弁護士ウィルソンに焦点を移して探偵物語にモード変更し、アイデンティティを一つに特定する方向へと筆を進めた。本論の最後では、この問題含みの結末に対する批評家たちの批判を踏まえ、多層的かつ流動的なアイデンティティを特色とするロクサーナ母子のプロットを無効化しかねない状態を招いてもなおトウェインが主張したかったアイデンティティのありようについて考察したい。

1 流動するアイデンティティ

奴隷解放後、北部社会に大量に流入してきた黒人に対し、黒人に職を奪われることへの怒りや、人種混淆、パッシングへの恐怖がクローズアップされ、第二の奴隷制とも呼ばれる新たな人種差別や暴力が北部社会にも横行した19世紀末に執筆された本作品は、1830年代の旧南部の物語という形式を借りながら、人種混淆やパッシングというタブーに踏み込んだ意欲作である。奴隷制、人種、法律、科学、ジェンダーといった様々なテーマを含むゆえに、作品の舞台となった南北戦争前の社会に、19世紀末の社会批判や文化を読み取ろうとする歴史的なコンテキストでの読み直しが積極的になされており、その成果はSusan Gillmanらが編んだ批評集に集約される。また、アイデンティティを特定する手段として、当時最先端の科学であった指紋が犯罪捜査の証拠として用いられる先駆的な探偵小説としても注目されている。

物語の分析に入る前に、まずは概要を確認しておこう。パーシー・ドリスコルが所有する、16分の1黒人の血が混じった奴隷、ロクサーナは、話す言葉は強い黒人なまりを帯びるが、白く、輝くほど美しい容姿をもった、明るく活発な女性として登場する。彼女は、白人シスル・エセックス大佐との間にできたとされる息子チェンバーズの母であり、また、息子と同じ日に生まれ、まるで双子のように容姿の似たトム（主人パーシー・ドリスコルの息子）の乳母でもある。白人の容姿を持ちながらも32分の1の黒人の血ゆえに、いつ川下に売り飛ばされてしまうかも分からぬ我が子の将来を悲観したロクサーナは、ゆりかごで眠る瓜二つの容姿をした赤ん坊たちの衣服をこっそりと取り替える。以来、白人主人の子を黒人の我が子チェンバーズとして、また、自らの子を主人の子、トムとして育ててゆく。「白人」となったロクサーナの実子トムは、乳母ロクサーナや「黒人」チェンバーズに対して冷酷で抑圧的な態度を取り、賭博や盗みを繰り返す青年となった。トムの暴君ぶりにいよいよ耐えきれなくなったロクサーナは、トムに、自分が実の母親であり、トムは黒人奴隷であると真実を告げる。人種入れ替えの秘密をこの世で唯一握る母として上位に立ち、

表向きはドリスコル家の跡取りであるトムを支配下に置こうとする。

博打で多額の借金を抱えるトムは、パーシー・ドリスコル死後養父となった伯父ヨーク・ドリスコルの金を盗もうと自宅に侵入した際、伯父を刺殺するが、人種や性別を偽る変装によって逃げおおせ、かわりに凶器である盗品のナイフの持ち主であったイタリア人の双子が容疑者として捕えられる。双子の弁護を引き受けたのは、町の人々の指紋を長年にわたって収集、研究することを趣味とするウィルソン弁護士だった。ウィルソンは、ナイフに残された指紋を使ってイタリア人兄弟の無罪を証明してみせる。さらに、トムとチェンバーズが乳児期に入れ替えられた事実も、乳児期より採取してきた指紋によって鮮やかに暴き、トムが真犯人でかつ黒人であることを立証する。突然白人とされたチェンバーズは黒人としての行動やメンタリティが抜けぬまま白人として生きねばならず、奴隷とされたトムは家畜と同じ動産ゆえ法の裁きは受けず、債権者たちによって川下に売られるところで物語は幕を閉じる。

さて、西洋の文学的コンヴェンションでは、女性は2つのステレオタイプに分かれて描かれることが多かった。すなわち、金髪碧眼で純真無垢、信仰心篤く美德を体現したような「フェア・レディ」（それが成長すれば、トムの叔母さんのような善良なキャラクターとなる）と、どこか官能的で黒さが混じり、男を惑わす「ダーク・レディ」である。こうした女性描写のコンヴェンションからも、「マミー」のような黒人女性のステレオタイプからも脱したロクサーナは、アメリカ文学史上稀にみる生き生きとした女性キャラクターとしてしばしば称賛される。

Roxana, however, defies all clichés: she is no gross, comfortable, placid source of warmth, all bosom and grin, but a passionate, complex, and beautiful mulatto, a truly living woman distinguished from the wooden images of virtue and bitchery that pass for females in most American novels. She is “black” only by definition, by social convention, though her actual appearance as described by Twain, “majestic...rosy...comely,” so baffled the platitude-ridden

illustrator of the official edition that he drew in her place a plump and comic Aunt Jemima! (Fiedler 404)

ロクサーナ創造におけるトウェインの達成は、白人女性や黒人乳母のステレオタイプを脱した、生き生きとした女性として彼女を描いたことよりも、むしろ、トウェイン自身が自ら多く描いてきた自己犠牲的な母親像に疑問を呈し、強く、逞しく、そして多層的かつ流動的なアイデンティティを持った女性を新たに描きえたところにあるとして評価されるべきではなからうか。

まず、奴隷制時代の南部白人社会では、黒人の母親に対してある想定があったゆえに「親子間の断絶」が「当然」と見做されていたことを確認しておこう——「奴隷の女たちは母親ではない、彼女たちは「生まれながらに死んでいて、自分の親に対しても、子孫に対してもいっさいの責務を負わない、という想定である」(モリスン 46)。親子間の情がないもの——したがって家畜のように親子バラバラに売り払っても白人は良心の呵責に苦しむ必要がないもの——として南部奴隷社会では黒人の母性の存在が否定されていた。一方ロクサーナは、ある時は、湧き上がる「母性」に支配されて、子を思う母親らしい——黒人でも白人女性と変わらぬ子への愛情をもつものだとロクサーナに言わしめている点では「白人の母親らしい」——行動をとっている。しかしその自己犠牲的な母の愛というものにロクサーナ自らが酔いしれているさまが滑稽に描かれるように、トウェインは、決してその「母性」を甘やかに描くことをしない。むしろその自己犠牲的な母性が従属性や悲劇性と結びつき、身を滅ぼしがちであることを執拗なまでに描いてゆく。

その隷属状態に耐え忍ぶ女であることをやめた時に、ロクサーナは、他に類を見ないキャラクターとなる。表向き主人である我が子トムに対してのみ、自らが本当の「母」であることを主張し、その主従関係を転覆させてトムを支配下に置く。そして表向きはドリスコル家の跡取りであるトムが、うまくその財産を受け取り、その金をロクサーナも得られるよう息子をコントロールしようとする。興味深いことに、自らの黒人性を主張するロクサーナの、奴隷的態度を脱したその支配的な振る舞いはむしろ白人男性的である。母性的な母親から

従属的な乳母、白人男性的な母親まで、多層的なアイデンティティを行き来する女性を創造することで、トウェインは、人種、ジェンダー、母性の虚構性を効果的にあぶり出すのだ。

ではロクサーナの多層的なアイデンティティとその流動を具体的に見て確認していこう。彼女のアイデンティティ形成には、息子であり、自ら作り上げた虚構によって自分の「おぼっちゃま」になったトムが存在が不可欠である。「かわいいわが子とおぼっちゃまと彼女の神とが合体した存在」(21)としてトムを育てられた幼少期は過ぎ、奴隷を人とは思わぬトムの言動によって黒人乳母としての立場を思い知らされると、母としてのアイデンティティを奪われたロクサーナに残されるのは、奴隷としての、耐え難いアイデンティティのみとなってしまう。

She saw her darling gradually cease from being her son, she saw that detail perish utterly; all that was left was master—master, pure and simple, and it was not a gentle mastership, either. She saw herself sink from the sublime height of motherhood to the somber deeps of unmodified slavery. The abyss of separation between her and her boy was complete. She was merely his chattel, now, his convenience, his dog, his cringing and helpless slave, the humble and unresisting victim of his capricious temper and vicious nature. (*PW* 23—24)

せめて息子だけでも救ってやろうと赤子を入れ替え、理不尽に耐えつつ大切に育て上げた母の思いが報われることはない。トムに理由もなく人前で暴力をふるわれ、あらゆる下品な言葉で罵られるという非道を日常的に繰り返されたロクサーナは、眠れぬほどの怒りに身を震わせ、やるせなさを呟くばかりだった。黒人乳母と白人の疑似親子関係や、母子関係に期待される麗しい愛はことごとく裏切られる現実が描き出される。理不尽さに打ち震えて耐える母に、怒りや苦痛を語る声を与えている点は注目に値するだろう。

トムの冷酷な振る舞いに耐えかねたロクサーナは、自分がトムの母であり、

したがってトムは黒人奴隷であるとその正体を告げることで、母の立場を奪還する。ロクサーナは、お化け屋敷のような掘立小屋にトムを呼び出し、ウィスキーをあおり、トムを脅し、跪かせ、金銭を要求する(43)。母であることを主張するほどに、ロクサーナは男性的に変化しており、ロクサーナを虐げてきた白人としてのトム、もしくは、ハックに父親の権力を誇示し、黒人差別や息子への暴力によってかろうじて白人男性としてのプライドを保っていた酒乱のパップ・フィンを想起させるほどに白さを帯びるのだ。一方のトムは、黒人であることが周囲に露見するのではないかとの恐怖から、黒人のステレオタイプをなぞるように行動が「女々しく」臆病になり、ロクサーナが白人主人、トムが黒人奴隷であるかのように主従関係が逆転する。このように、ロクサーナとトムの母子関係では、母子関係に潜む支配の構造が、人種、ジェンダーのイメージと絡められてよく表され、母性、人種、ジェンダーの虚構性が浮き彫りにされている。

別の場面も見てみよう。トムがイタリア人兄弟から決闘の申し込みを受けたものの、代わりに伯父に押し付け逃げだしたことを、ロクサーナになじられる場面である。

En you refuse' to fight a man dat kicked you, 'stid o'jumpin' at de chance! En you ain't got no mo' feelin' den to come en tell me, dat fetched sich a po' low-down ornery rabbit into de worl'! Pah! it make me sick! It's de nigger in you, dat's what it is. Thirty-one parts o' you is white, en on'y one part nigger, end at po' little one part is yo' *soul*. 'Tain't wuth savin'; 'tain't wuth totin' out on a shovel en tho'in' in de gutter. You has disgraced yo' birth. What would yo' pa think o' you? It's enough to make him turn in his grave. (PW 75)

逃げ出したトムに対し、血が騒いだロクサーナは至近距離から決闘を見守り、流れ弾が鼻先をかすめても、怖気づくことなど全くない雄々しさを見せている。さらに、逃げ出したトムのいくじのなさを「黒人の血」のせいにし、開拓時代

からの旧家出身の父に連なる血を穢すものとして、亡きエセックス大佐になりかわるように叱咤する。⁴⁾ここでのロクサーナもまた、男性性と白人性を呈していることが確認できるだろう。

不甲斐ない息子に対して愛情がいったん冷めたように見えてもなお、時折母性的愛情が抑えがたくロクサーナを襲い、そのたびにロクサーナは元の自己犠牲的な母に戻る現実もまた描かれる。賭博で大金を失い困り果てるトムをロクサーナが眺める場面において、湧き上がる母性愛を抑えきれなくなったロクサーナは、白人でも黒人でも母親は息子の為になんでもするように神様は作っているのだと主張し、自分を一時的に奴隷として売り金にすることをトムに提案する。トムはその申し出により希望が見えたことに対して喜びを感じはする。しかし、黒人のアイデンティティをにわかに受け入れられない彼にとって黒人の母の愛情は、情緒的で心地よいものなどでは決してなく、耐え難いほどに気持ち悪いものでしかないのだ。

That was reason enough for a mother to love a child; so she loved him, and told him so. It made him wince, secretly—for she was a “nigger.” That he was one himself was far from reconciling him to that despised race.

Roxana poured out endearments upon him, to which he responded uncomfortably, but as well as he could. And she tried to comfort him, but that was not possible. These intimacies quickly became horrible to him, and within the hour he began to try to get up courage enough to tell her so, and require that they be discontinued or very considerably modified. (*PW* 85-86)

息子は自分を比較的良好な環境に売って、すぐ買い戻してくれるだろうとのロクサーナの目論見は外れ、彼女は我が子に、より過酷な奴隷制を有する川下へと売られて絶望を味わう。このように、母的な愛情が美化されることなく、母の期待は裏切られ続け、自己犠牲、隷属状態というネガティブなものに繰り返し結び付けられるさまが確認できるだろう。

2 装われるアイデンティティ

虐げられる黒人乳母から、雄々しく、強大な母へ、さらに黒さと隷属性を帯びた、非力な母へと変貌した後には、ロクサーナが隷属状態から自力で這い上がり、強い母への復権を果たす場面が描かれる。ロクサーナがトムの前に再登場する場面では、白人と変わらぬ容姿の彼女が顔を黒く塗り、ぼろを身にまとった黒人男性になりすます変装が描かれるが、トムのアイデンティティの多層性、流動性もまた、異性装、異人種装によって効果的に表されている点に注目してみよう。盗みを行う際、しばしばトムは白人女性に変装していたが、自宅に盗みに入り、伯父を殺害した場面でもトムは、逃亡用の女物の服を準備してから、顔を黒く塗って黒人青年の姿で犯行に及んでいる (99)。

There he felt the old man's strong grip upon him, and a wild cry of "Help! help!" rang in his ear. Without hesitation he drove the knife home—and was free. . . .

Tom put on his coat, buttoned his hat under it, threw on his suit of girl's clothes, dropped the veil, blew out his light, . . . (*PW* 100)

実の父である亡きエセックス大佐でも、表向きの父である亡きパーシー・ドリスコルでもないが、養父である伯父を殺害することは、まずは父殺しの変奏と解釈できる。ロクサーナを白人男性の欲望の犠牲になった存在として捉える James Cox を始めとする批評家たちは、「母の代理として」父殺しを行う「復讐のエージェント」としてトムを捉えるが (Cox 222-46, 笹田 175)、本稿では彼女が黒人やトラジック・ムラートのステレオタイプから逃れた存在であること、さらに決闘から逃れたトムに対し、ロクサーナがトムの白人の父の名を出しながら、トムに流れる黒い血を罵った際に、怒りを覚えたトムが、父が存命ならばこの手で殺し、父に負うものがないことを母に見せつけたいと思いを巡らせていた事実 (*PW* 75) に重きを置き、この場面を、トム自身の復讐劇として読みたい。そう解釈すると、この場面は、父に対してだけでなく、白さにす

がる母に対する復讐としても読むことが可能となる。養父を刺した瞬間に“free”になったという記述は、むろん文字通りには掴まれていた体が放たれたという意味だが、黒人としての宿命を自らに与えながら、トムの黒人性をなじり白人相続人としての不甲斐なさを批判する母への鬱憤を「父」殺害により晴らすという精神的な解放を読み込むことができるだろう。⁵⁾

一瞬の解放感を味わったトムだが、母の影響から容易に逃られるわけではない。というのも、この後、トムは、むしろ母を反復するような行動を取ってゆくからである。トムは伯父殺害後の逃亡の際、返り血を浴びた男の衣服の上に、あらかじめ用意しておいた女の衣装を重ね、パールを落として黒さを覆い隠し、町の人々の目を欺いて現場を離れると、さらに浮浪者風の男性に変装することで町の外へと逃れる。この自由への逃亡における2回の変装に関しては、母を象徴的に演じていると読み込めるのではないだろうか。つまり、最初の異性装に関しては、黒人の息子を自由へと逃すべく、衣服で黒さを隠し人々の目を欺く行動に出た若かりし母の再演、さらに、2回目の、浮浪者風男性への変装も、同様の变装で自由へと這い上がった母の再演と読めるだろう。むろん、いずれも犯人特定から逃れるための変装なのだが、白人青年から白人女性、黒人青年、黒人女性までを演じる流動的で多層的な姿、そして、反転しつつも母と鏡写しの状態にあり逃れられない姿は、なによりトムのアイデンティティのありようを的確にあらわしている。

3 母の敗北ののちに

『まぬけのウィルソン』執筆の直前に読んだ優生学の権威フランシス・ゴルトンの指紋研究書や、1888年の指紋による犯罪者識別法の成立に感化されたトウェインは、当時最先端の科学であった指紋を探偵物語として取り入れるアイデアに夢中になり、取り替え子の物語へと物語を大幅に書き改めて一気呵成に書き上げたことが知られている (Rasmussen 139, 378)。ロクサーナ、トム母子中心のプロットは、指紋収集を行ってきた弁護士ウィルソンへと焦点が

移され、多層的アイデンティティを特色としていた本作品は、科学的にアイデンティティを特定し、南部の法に則ってそれぞれの人種が置かれるべき場所に位置づけ直す方向へと大きく流れを変えてゆくことになる。

このような結末や、ロクサーナが、嘆き悲しむ悲劇的な母に戻ってしまうことが、多くの批評家たち、とくにトウェインを人種、ジェンダーやフェミニズムの観点から捉え直そうとする批評家たちを落胆させてきた。たとえば、Carolyn Porterは、「母が性的で、奴隷が力を持ち、女性が一時的に制御不能となる」物語世界の中心人物として、プロットを握るロクサーナを評価し、抑圧的な父権プロットと転覆的な母権プロットのせめぎあいとして本作品を解釈するが、結局は父権的な秩序が勝利を収めるとする (124)。トウェイン作品の女性登場人物たちを検討したAnn Ryanもまた、「結局、トウェインは男としての、そしてユーモリストとしての己の権威を保つために、高らかに笑う女たちを川下に売った」のであり、近しい女性たちへの愛情と理解があった作家だったからこそ、トウェインのフェミニズムは悲劇的なものだ結論付けている (211)。

確かに、計略が暴かれた後のロクサーナは、神に救いを求めて嘆く非力な母へと変貌して物語から姿を消してしまう。裁判後、トムが殺人者として裁かれるのではなく、動産として釈放され、川下に売られてしまうアンチクライマックスに戸惑いを覚えた読者も少なくないだろう。しかし、もし白人だったら殺人罪で処刑されることをロクサーナから来る黒い血ゆえにトムは命拾いをし、かつて自ら母に与えた運命をなぞるように今度はトム自身が川下に売られる因果応報の結末は、計略が科学や法により挫かれてもなおしごとく残るロクサーナの影響力を感じさせる。

また、指紋という科学によるアイデンティティの特定を取り入れたことは、多層的なアイデンティティを生きるロクサーナ親子のプロットを無効化してしまう危険を孕むばかりでなく、次のようにトウェインの人種観についても疑念を招き得るだろう。

チェーザレ・ロンブローゾに始まる犯罪人類学の分野において、

一八八八年にフランシス・ゴルトン卿が指紋犯罪者識別法を確立したことがトウェインに大きな影響を与えたことはよく知られているが、トウェインは人種の虚構性を強調することによって人種差別の反対を説いたのではなかった。逆に、そうした恣意的な基準による差別ではなく、科学的に証明された事実による人種差別を奨励したと考えられるのである。(大串127)

優生学の権威、ゴルトンは、当初は白人の優位性を指紋のパターンに読み取る目的で指紋研究を行ったが、結局指紋は個人を特定する手段にはなっても人種の特定や、人種の優位性・劣性を立証する手段とはならなかった。物語においても、指紋はあくまで個人を特定するものである。白人、黒人の赤ん坊の入れ替えがあったゆえ結果的には入れ替えられた人種を暴くことになってはいるが、その人種アイデンティティに関しては決して絶対化されてはいない点に留意したい。指紋を使ってトムの子供を暴くスリリングなクライマックスで物語を終わらせず、赤子の入れ替え判明と法により、二人が人種社会に「正しく」位置づけ直されてもなお、人種アイデンティティが絶対化されない結末まで書ききったところに、むしろ本作品が評価されるべきポイントがあるのではないか。裁判後、表舞台からひっそりと消えたロクサーナとトムに代わり、表向きロクサーナの息子とされていたもう一人の子供、チェンバーズが、その最後のメッセージを示す大切な役割を担っているように思われる。

The real heir suddenly found himself rich and free, but in a most embarrassing situation. He could neither read nor write, and his speech was the basest dialect of the negro quarter. His gait, his attitudes, his gestures, his bearing, his laugh—all were vulgar and uncouth; his manners were the manners of a slave. Money and fine clothes could not mend these defects or cover them up, they only made them the more glaring and the more pathetic. The poor fellow could not endure the terrors of the white man's parlor, and felt at home and at peace nowhere but in the kitchen. The family

pew was a misery to him, yet he could nevermore enter into the solacing refuge of the “nigger gallery”—that was closed to him for good and all. (PW 120-121)

科学と法で規定された通りにトムとチェンバーズが社会に「正しく」位置づけ直されてもなお、現実ではアイデンティティがミスプレースされた感覚をどうにも解決できぬまま、黒と白の狭間を浮遊せねばならないところにチェンバーズの悲劇がある。当時の最先端科学や法で定められても決して解決することができないそのアイデンティティのありようが、よりいっそう人種の虚構性を浮き彫りにする。それは、一つに規定しえないアイデンティティのありようをさまざまな形で提示したロクサーナとトムのプロットが科学に退けられてもなお響く、トウェインの主張といえるのではないだろうか。

結び

アメリカ文学史上まれにみる女性キャラクターの一人とも評される『まぬけのウィルソン』のロクサーナの魅力は、単に、白人女性、黒人女性双方のステレオタイプを脱した点にあるのではなく、むしろ、その流動的かつ多層的なアイデンティティにこそあるだろう。ことに、しばしば従属性と結び付けられていた従来の母親像をトウェイン自ら揺るがし、それによって得られるアイデンティティの流動と多層性をロクサーナに体現させたことは、括目すべき挑戦だった。奴隷社会にだけでなく、美化されがちな母子関係にも確かに潜む主従の束縛的關係にトウェインが挑んだとき、ムラートの母は、限りなく白く、男性的になり、相関関係にあるその「白人」の息子は黒さと女々しさを帯びてゆく。トウェインは、異性装、異人種装、母を装う変装も効果的に用いながら、一つに規定されずに流動するアイデンティティのありようを描きだし、人種、ジェンダー、母性の虚構性を浮き彫りにしたのだ。

子供たちを入れ替えたロクサーナの計略が、アイデンティティを特定する科学によって暴かれたとき、かつての強いロクサーナの姿は失われ、敗北を見る

かもしれない。しかし、この敗北を経てもなお、科学や法をもってしても定められないアイデンティティのありようが、ロクサーナの「子ども」を通じて描かれる。白人として解放され、彼にとっては牢獄のように感じられる白人社会で、黒人としてのパーソナリティのまま生きねばならないチェンバーズ。黒人奴隷とされて牢獄から解放されたことで死を免れたものの、川下へと売られ、黒人奴隷としてより過酷な奴隷制を生きねばならない元白人のトム。解放と捕囚の双方を生きねばならない子どもたちの宿命を通じて、一つに定められないアイデンティティという物語のテーマは示され続ける。

註

1. 上品でか弱い19世紀的な「家庭の天使」としての母親では——たとえそれが保守的女性観を持つトウェインが理想とした女性像であったとしても——少年たちの度を越えた悪戯や心配に耐えられず、子どもの逞しい成長と自由を阻みうるという点で都合が悪い。また、父権的な白人男性では、白人の子供たちが対等に振る舞い、時には攻撃することを許すような存在にはならない。トウェインの描く代理的母がどこか「黒さ」や階級差を帯びるのは、そのような事情も関係するのだろう。
2. ハックがジュディス・ロフタスに性別を見破られる場面におけるジェンダーのパフォーマンスイビティに関する論考はMyra Jehlen、トウェイン作品における異性装モチーフに着目した著書に関してはLinda Morrisの*Gender Play in Mark Twain*参照。
3. その他、「おてんば娘」の成長物語においてジェンダーの問題に取り組んだ晩年の短編作品「馬の話」(“A Horse’s Tale”)では、ヨーロッパの良家に育った病弱の母に代わり、たっぷりと愛情を注いで馬の名手に育てるのは、“male mothers”と形容されるアメリカン・フロンティアの男たちである。
4. Arthur Pettitによれば、チェンバーズもトムも当初は白人主人パーシー・ドリスコルとの間にできた子という設定だった(208)。トウェインは、トムの実の父をエセックス大佐に変更することにより、白人主人が、黒人奴隷とも関係を持ち子をもうけるという、当時の南部では珍しくはなかった露骨な性の事情を暴露することを避けてはいる。Marvin Fisherが指摘するように、読者層のヴィクトリア朝的性モラルへの配慮からこのような変更がなされる必要があったにせよ(312)、それでもなお、同日に生まれた二人の子供が双子のように似ているという設定は、より際どい性の事情を暗示するに十分といえる。ロクサーナは始めから母として登場し、トムの父親との情事は描かれない。しかし、白人主人たちの欲望の犠牲となったいわゆるトラジック・ムラートの型にはまらず、主体となってエセックス大佐とロマンスを持った可能性をLinda Morrisが指摘するほどに(66)、ロクサーナは、トムの父親がヴァージニア開拓時代からの旧家出身であることを誇り、トムに流れる32分の1の黒人の血を蔑む女性として描かれる。

5. 父殺しの予兆としてしばしば指摘される場面に、子供時代、チャンバーズを「トム・ドリスコルの黒んぼのパパ」(PW23)と呼ばれ、激高したトムがチャンバーズをナイフで刺し大けがを負わせた場面がある。しかし、表向きはロクサーナの息子であるチャンバーズは、ロクサーナの代わりにトムにつき従い、身を挺してトムを守るもののロクサーナと同じく理不尽な扱いばかり受けており、「パパ」というよりもむしろ乳母ロクサーナの代理的存在であった。その点を鑑みても、母の復讐の代理としての「父殺し」という観点のみでの読みでは不十分と思われる。

Works Cited

- Cox, James. *Mark Twain: The Fate of Humor*. Princeton: Princeton UP, 1966. Print.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel*. Normal, IL: Dalkey Archive Press, 1997. Print.
- Fisher, Marvin and Michael Elliott. "Pudd'nhead Wilson: Half a Dog is Worse than None." *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. 1st ed. Ed. Sidney E. Berger. New York: Norton, 1980. 304-15. Print.
- Gillman, Susan and Forrest G. Robinson, eds. *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Durham: Duke UP, 1990. Print.
- Jehlen, Myra. "Reading Gender in *Adventures of Huckleberry Finn*." *Adventures of Huckleberry Finn: A Case Study in Critical Controversy*. Eds. Gerald Graff and James Phelan. Boston: Bedford, 2004. 496-509. Print.
- Morris, Linda A. *Gender Play in Mark Twain: Cross-Dressing and Transgression*. Columbia: U of Missouri P, 2007. Print.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. London: Picador, 1993. (トニ・モリスン『白さと想像力—アメリカ文学の黒人像』大社淑子訳. 東京: 朝日選書, 1994.) Print.
- Pettit, Arthur G. *Mark Twain & the South*. Lexington: UP of Kentucky, 1974. Print.
- Porter, Carolyn. "Roxana's Plot." *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Eds. Susan Gillman and Forrest G. Robinson. Durham: Duke UP, 1990. 121-136. Print.
- Ryan, Ann M. "The Voice of Her Laughter: Mark Twain's Tragic Feminism." *American Literary Realism* 41 (2009): 192-213. Print.
- Twain, Mark. *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. 2nd ed. New York: Norton, 2005. Print.
- 大串尚代. 『ハイブリッド・ロマンス—アメリカ文学に見る捕囚と混淆の伝統』 東京: 松柏社, 2002. Print.
- 笹田直人. 『まめけのウィルソン』とバッシング—同一性喪失の誘惑』『ユリイカ 詩と批評 7月号』 東京: 青土社, 1995. 167-179. Print.